

古代から江戸時代まで

この土地の歴史は相当古く、数千年の昔、つまり縄文文化の時代に人が住んでいました。古代には対岸の秋多町にある大塚とか瀬戸岡古墳と呼ばれる豪族の墓でもわかるように、これらの豪族が秋留台地を中心に附近一帯を支配していて、福生もその支配下におかれていました。

中世に入ると集落が発達し、福生郷という地名もつけられ、多くの武士が土着し小宮、滝山の城主の支配下にもありました。太平記に見られる石浜の合戦は日本歴史上有名です。

近世に至っては、5代にわたって関東に威をふるっていた北条氏も、豊臣秀吉に屈し、徳川家康の入国と同時に天領、私領の入会地となり福生村、熊川村が独立村として代官、旗本の支配地で幕末にいたるまでおさめられました。

明治・大正時代

明治に入ると廃藩置県によってこれ等の制度が改められ、葦山県6番組に属し、明治5年には神奈川県12区5番組となり、同12年には西多摩郡役所の管轄となりました。さらに明治17年には福生、熊川（現福生町）川崎、五ノ神、羽



南団地前で発見された古代人の住居跡、右上は発掘された土器

村（現羽村町）の5村で川崎村連合戸長役場が置られました。

その後明治22年の町村制の施行とともに福生熊川の両村をもって組合役場を設けて事務の共同処理にあたり、その後50年にわたってこの状態が続きました。この間に明治26年には神奈川県と東京府の境界変更があり東京府の所管となりました。

福生町の誕生

昭和15年、長い間続いた両村の組合役場も合併の機運がもりあがり、同年11月10日両村の合併により人口7921人をもって町制が施行されました。

昭和の初期までは養蚕を主とした農村で、片倉製糸をはじめいくつかの製糸工場がありましたが、昭和14年に武蔵野の山林一帯約200ヘクタールが接收され、陸軍航空審査部と整備学校が設置されると、人口も急増し一躍軍都として発展するようになりました。終戦と同時にこの陸軍の施設は全部米軍に接收され、さらに80ヘクタールが追加され現在の横田基地になっております。

戦後の福生町はこの基地を中心として、基地労務者、サービス業等が激増し、更に米軍ハウスが約2000戸も建てられ、農業規模は縮少しましたが、商店街は急速に整備されました。

昭和37年基地の町からの脱皮が真剣に考えられ、首都圏整備法による市街地開発区域の指定をうけ、都市計画をすゝめ、また増大する行政需要に対処し学校をはじめ道路、下水、水道など都市施設の充実も着々と進み、健康で文化的な近代都市への歩みが続いています。

青梅線の東京直通も増発され、都心への時間も短縮され、衛星都市として明日への発展が約束されています。

福生市のおいたち



市の地勢

福生市は都心から西へ約40キロ、東京都の山添いに近く、多摩川の東北側に南北に横たわる市です。

地勢は多摩川流域に向って3段階をなして傾斜しており最も高い段丘で海拔130m、最低は100mで多摩川沿岸となっております。その一番上の段丘は、かつて雑木林で、国木田独歩の武蔵野を思わせたところでしたが、今は米軍横田基地でその周辺には米軍家族のハウスが立ち並んでいます。中間の段丘は市街地で南北に一直線に青梅線がとおり、その下の段丘は農家が多く、段丘にそって300年前江戸市民の水を確保するため玉川右衛門、清右衛門の手によって造られた玉川上水があり、今も多摩川の清水を都民に送っております。またこの水を利用して先代の人たちが苦心して開いた水田60ヘクタールがあり、昨年までは青々としていましたが、今年から本格的に土地区画整理事業が始り、四季折々の美しい風景も消えようとしています。